水牛通信　毎月１回10日発行　1980年12月10日発行　通巻18号　1980年５月23日第三種郵便物認可

水牛通信

VOL.2 NO.12
毎月1回・10日発行
定価200円

人はたがやす　水牛はたがやす　稲は音もなく育つ

水牛楽団おおいに語る　2

詩三篇
まなびあい　厚い囲み　キド　木島　始　9

楽譜
キド　13

歳月의 오며는・時がくれば　14

忘れるな光州　16

壁のうちそと　鎌田　慧　20

三里塚・たたかいの暦　22

闘い続ける人々の視線に射抜かれて　山崎満喜子　24

食いすぎの害について　津野海太郎　27

水牛楽団おおいに語る

福山　敦夫
八巻　美恵
福山伊都子
高橋　悠治
西沢　幸彦

●楽器のこと

アツオ　ぼくは、いまは楽器なし。ギターはもたないことにした。ギターをコードでボロン、ボロンってのは、すぐフォークふう、ニュー・ミュージックふうになっちゃうじゃない。ギターでも、ひきかたを工夫すればいいんだけど、ぼくはホラ、いまは歌に専念しようとしてるんでね。

ミエ　歌手に徹するのよね。

イツコ　あたしのハルモニウムはインドの楽器で、オルガンを小型にしたみたいなもの。なんていうのかな、片方の手で空気を送りこむようになってて……

ユウジ　フイゴ。

イツコ　もう片方の手で鍵盤をひくの。いまでもインドではつかってるのかしら？

ユウジ　ヨーロッパのポルタティフってオルガンがあるのね。それがおなじ格好なわけ。ただ、フイゴなんかは一方にしかはたらかない。それが両方、吸っても吐いてもはたらくようになったというのは、すこし近代化してるけど……。十九世紀、いやもっと前かな、ヨーロッパからインドにはいってきて、でも古典音楽にはつかわれてないんだよね。やっぱり平均律だからね。大道芸人とか民謡とかさ、そういうものにつかわれてるみたい。

イツコ　いまでも？

ユウジ　うん。ベンガルのタゴール・ソングなんかは、あれでやるんだよね。タゴールのつくった歌というのは、二〇〇〇曲ちかくあるんだ。アフガニスタンなんかでも、あれだよな。

アツオ　もちはこびが、ちょっと大変だね。

ニシザワ　からだの丈夫な人じゃないと。

アツオ　もうちょっとかんたんなものがあるといいんだけどな。

ミエ　ユウジさんは大正琴。

ユウジ　と、タンブリン。あの大正琴は質屋で買ったんだ。質屋で売ってるのを、前から知ってたのね。いちおう楽器屋にもいったんだけど、もうなかった。質屋でも、やすいのやたかいのや、いろいろあるんで、「どこがちがうのか」ってきいたら、塗りだけだっていうわけ。そこにいろいろ、「御所車」とか「紅鶴」とか、きれいな銘がついてる。それがちがいだっていうから、いちばんやすい、ただの黒塗りのを買ってきた。

ニシザワ　水牛楽団なんだから、「御所車」がよかったかもしれない。

アツオ　質屋でいくらぐらい？

ユウジ　六千円だったかな。ハルモニウムは草野妙子さんに買ってきてもらったんだけど、あれは最高級品なんだってさ。いろんなものがついてて、八万円。

ミエ　だから重たいのよね。

ユウジ　二万円ぐらいからあるらしい。

ミエ　わたしのタイコもたかいのよ。あれはイギリス製なんだけど、ルネッサンスの、サイド・ドラムっていって、わきにおいて、本来は二本のバチでたたくんだけど、なぜか、私は一本しかつかわない。歴史があさいものですから。でも、ちゃんと両手をつかって、左手はてのひらでたたくのよ。そのほうが、音に表情がでるだろうといって。

アツオ　いくらぐらい？

ミエ　三万何千円とか……。

ユウジ　そんな感じだったね。

ミエ　でも、数あるタイコのなかではやすかったの、そういう古典楽器のなかではね。

ニシザワ　ぼくのは、自分でつくったんですよ。ケーナっていう中南米でつかってる笛にちかいんだけど、あれはつかいにくいんでね、半音やなんかがでにくいんで、自分で穴をあけて、竹でつくったんです。その竹は篠竹といって、節と節とのあいだがながいやつを、釣竿屋さんにいってもらってきた。乾燥してないのをつかうと割れたりするんで、前にもらってあったのを、ダンボールの箱にためておいた、そのなかからえらんだんです。

アツオ　何本かつくったんだろ？

ニシザワ　水牛楽団用には三本。そのうち二本は失敗した。竹の径というか、太くなったとこから細くなったとこへのしぼりが、計算どおりうまくいかなくてね。いちいち穴をあけて、修正してやっていくんで、わりあい面倒くさい。いまつかってるのも、まだ完全じゃないんで、そのうち、またやってみようと思ってるんだけど……

ミエ　ほかにも、あたらしい楽器をつくるつくるといってて、いつまでたってもできあがらない。

アツオ　幻の名器カバーン。

ミエ　鞄をかねてるからね。共鳴器のところへ着がえの衣服なんかを入れて、それで巡業するの。

イツコ　アツオは胡弓をつくるっていってるわよ。

アツオ　ぼくばかり歌ってると単調になるという批判がある。ときには女性コーラスの伴奏にまわりたい。はじめ沖縄の三線（サンシン）をやりたいなと思ったんだけど、三線と大正琴は競合するからさ、弦で持続するやつのほうがいい。

イツコ　どうやってつくるの？

アツオ　木の箱に棒をさしこんでね、それにフレットをつけてさ。フレットっていうのは、音程の目安をつける刻み目なんだけど、フレットがないと、相当に熟練しないとひけないからね。

ユウジ　サーランギみたいのがいいんじゃない。

アツオ　サーランギってなに？

ユウジ　インドにある小さなチェロみたいなの。弦が上に浮いてて、かたくて下まで押えられない。だから弦の横に指をあてるんだ。

その指をあてるとこの下に、木に刻み目を入れておけばいい。

アツオ　なるほどね。しかし、いずれにしても歌いながらというのは無理だな。

ユウジ　いや、歌いながらやるのよ。膝にこう楽器を立ててさ。本当は、ハルモニウムっていうのも歌い手の楽器なんだよ。だから男と女の音域にあわせてある。

アツオ　水牛楽団の楽器というのは、まず簡便であること。奏法も、それからもちはこびも、かんたんであるということだな。電気をとおして増幅しないでも、アンサンブルができる。そんなとこが原則かな。でも、かんたんにひける楽器というのは、そんなにない。なんでも、相当に練習しないとあつかえないね、やっぱり。

ユウジ　大正琴は「三時間でできます」って書いてあったけどね。いままで、いろいろ失敗してるからね。目星をつけてえらんだのもあるけど、まア、試行錯誤だよ。ただ、そういう楽器をつかうってことで、スタイルはひとつできてくるね。ふつうバンドをはじめるっていうと、まずエレキ・ギターを買って、アンプ一式そろえる、そういうことじゃない？　すると車がいる。その車をサッとのりつけて、アンプなんかを配置してさ、ガンガンやる。そういうスタイルだよ。ハルモニウムを背負い子につけて、電車でいくっていうのとは、ちがうんだよね。

アツオ　タイの「カラワン」なんかは、どうしてるのかな？　ギターとケーンと……

ユウジ　ケーンはつかってないと思うな。はじく楽器と、それからタイコは民族楽器をつかってるみたいだ。「カラワン」っていうのは、タイのなかでも特別のスタイルをもってるね。ほかのバンドは、やっぱりヤマハのオルガンやエレキ・ギターだったり、フォークのスタイルだったりするわけよ。おなじ歌をやっても、まったくちがうふうにきこえてくる。ひとつはコードがないってこと。ギターのつかいかたもちがうしね。ギターのコードから解放されると、はるかにいろんなことができるんだよ。フォークなんかだと、ふつうギターをひきながら歌をつくる。そうするとメロディがきまってきちゃう。どんな詩でも、おんなじようなパターンにのせてやれる。それはまア、つよみといえばつよみなんだけどさ。

アツオ　ワン・パターンだから、だれにでもできる。いくつでも曲がつくれるけど、みんなおなじようなものになっちゃう。

●レパートリーのこと

アツオ　いままで水牛楽団がやった曲というと、三、四十はあるかな？

ユウジ　そうね。

アツオ　「水牛歌集」にのってるのが二十曲ぐらい。そのほかに、今年になってドドッとふえた。韓国のがふえちゃったね。タイの歌は、はじめはＰＡＲＣ（アジア太平洋資料センター）なんかをつうじて、はいってきたんだっけ？

ユウジ　そう、いちばんはじめはね。あそこにカセットで送られてきた。フィリピンのはトンドにいって、そこで歌ってもらったのを録音してきたのがはじめ。あとは、アメリカでフィリピンの運動をやってるとこがレコードをだして、そこからとったものがすこしある。

アツオ　チリの歌は、こっちで市販されてるレコードがあるからね。タイでカセットがさかんだっていうのは……

ミエ　きく道具がかんたんだってことじゃないの。ふつうの家にはステレオ・セットなんてないから。

アツオ　きく道具をふくめて、かんたんにもちはこびができる。それとコピーして、どんどんひろめていくことができる。

ミエ　タイのカセットって、テープのおわりまで歌がはいってるの。さいごの歌ははいりきれないもんだから、途中でプツリと切れるのね。

ユウジ　それで、つづきが裏にはいってるってわけじゃない。それきりなんだよ。

アツオ　水牛楽団のカセットもでまわってるらしい。日音協のひろば合唱団といっしょに、二年ほど前に録音したやつ。

ユウジ　韓国のは、カセットでつたわってきたのはごく わずかで、歌っている人がたまたま日本にやってきたとか、そういうかたちでつたわってくる。キム・ミンギのものなんかは、むこうで地下出版みたいに録音したのがあって、それを韓民統がレコードでだした。なんとなく歌がつたわってきたのは「プリパ」。口づたえでね。だから、節もいくとおりもあるわけだよ。

アツオ　「その時その人」はバラバラにきたんだ。

ミエ　曲とことばが別々に。曲は人気歌手のがレコードで手にはいるでしょ。

ユウジ　ことばは「世界」のＴＫ生の通信にのってる。それをレコードをききながら、あてはめていった。

アツオ　こうしてみると、ちゃんとしたレコードや楽譜ではいってきたのは、本当にすくないね。

ユウジ　チリの歌にしても、発売されてるレコードはすくない。ビクトル・ハラのレコードもいっぱいあるんだけどさ、アルゼンチンとかのね。そのアルゼンチンの原盤が、いまはもうないんじゃないかな。自分が歌ってるのと、ほかのグループが歌ってるのとでは、相当にスタイルがちがうんだよ。

アツオ　そうしてはいってきた歌を、なんとか日本語にしていく。

ユウジ　まず、どの歌をうたうかということがあるわけだよ。つまり、むこうの運動でうたわれている歌のなかから、日本でうたってもそんなにかけはなれていない、そんな歌をえらぶ。それから、それに訳詞をつける作業にはいる。訳詞っていうのは、昔から実際にやられてるのは、じつは作詞なんだよ。そのときどきのこっちの運動の状況におうじて、「平和」だったり「自由」だったり「幸福」だったり、適当にやっちゃうわけだ。だから、それはなしにしようと思ってね。もとのことばを、できるだけそのまま日本語にしようというのが原則なんだ。

たとえばタイの歌だったら、タイ語を知ってる人が、一語一語、タイ語を日本語におきかえていく。それを日本語として、曲にのるようにしていくという順序になるね。全体の意味だけで節にはめこむというような、大雑把なものじゃないんだな。かなり厳密なやりかたをしてる、っていうのも、思いこみでやっちゃってる訳詞がおおいわけよ。たとえば「自由よ、早くこい」というふうになってるとするじゃない。そうすると、これではちょっとよわい、「自由をかちとろう」と、そういうことばになっちゃう。こっちの運動のつごうなんだよ。

アツオ　多少、うたいにくいということができても、とりあえずは、もとのことばの意味にそわせてうたっていく。日本語としてなめらかにいくというふうにじゃなくても、とりあえずね。楽団名のもとになった「人と水牛」にしても、初期から見ると、ずいぶん変ったよね。

ユウジ　何年かやってるとなれてきて、もうちょっとうまい日本語にできるんじゃないか

という気がしてくる。

アツオ　演奏方法にしても、「人と水牛」なんかだと、もともと、いろんなスタイルがタイにある。初期にやってたのは、「カラワン」が都会でやってたころのスタイルなんだ。なまの楽器だけど、わりとロック・バンドふうなやつ。

ニシザワ　節なんかもだいぶ変ったの？

ユウジ　うん、変った。

アツオ　「白いハト」にしても、あれはいい歌だからうたおうと思うと、全然ちがっちゃってると文句いう人がいる。

ユウジ　全然ちがうっていうことはないだろう。

ミエ　それはそれでいいんじゃない。

ユウジ　タイの歌は、こまかい節まわしを変えたとこがあるんだけど、それはタイ語というものがすこしわかってくるとね、いままで小節だと思ってたとこが、じつは小節じゃないのね。声調を忠実にやってるだけなんだ。だから、おなじ節で一番、二番、三番とあって、ことばが変る。声調もだいたい合わせてあるんだけど、変るとこもある。すると節も変るわけね、それによって。だから日本民謡の、うなりながら適当につける小節というのとは、全然ちがう。タイ語をそのままいってると、そういう抑揚になっちゃう。小節のあるなしっていうのは、どこかでだれかがいってることなんだけど、抑圧されている度合のちがいなんだってね。抑圧されて屈折してるところでは、小節のおおいものができるっていうんだけどね。

●生活のこと

ミエ　水牛楽団というのは、たしかに存在してるらしいんだけど、あれはいったいなんだろうということになってるみたいよ、世間では。

アツオ　たしかに存在してる。この五人に、あとはニシザワさんの奥さん。三夫婦で結束をかためて……

ユウジ　結局、家族だけが最後にのこる。別れる以外にしょうがない。

アツオ　演奏するのは、やっぱり集会がおおいな。

ミエ　コンサートといっても、集会みたいなもんだよね。

ユウジ　もともと、自分からやりだしたバンドじゃない。必要があってやりだして、それが水牛楽団だということになる。いちばんはじめもそうだし、再発足もそう。

アツオ　でも、昔からこういうことはしたいと思ってた。見当がつかなかったけどね。そう思いながらも、はじめたときには、いくらか抵抗があった。うたう以上は、運動の状況を知らなければと、いろいろな人たちと出会うことから、「正義と解放のために」なんていうことばも、だんだん、確信をもってうたえるようになったんだ。今年の夏、フィリピンでうたったんだけど、それはすごくよかった。三里塚の歌をうたうっていうと、それだけで、みんなが拍手してくれるんだよ。三里塚の闘争というのが非常によく知られていて、うたいやすかった。

ニシザワ　今後のことを話そうか。

ミエ　いままでは、呼ばれたとこにでかけていったんだけど、これからは、自分たちでコンサートをやるのもいいんじゃないかと思って、それをはじめたとこ。

アツオ　来年の一月にはタイにいく予定なんだけどね。

ミエ　タイの人たちは、日本語にタイの「生きる歌」が訳されて、うたわれているというのを、よく知ってるのね。タイにいった人の

話なんかをきくと、学生たちが「白いハト」を知ってるだろうというんだって。知ってるというと、どっかからパッとギターがでてきて、うたえ、うたえっていうんだって。つぎの日にいくと、もういっぺん、あれはよかったからうたえといわれるのね。それでぜひタイにいきたいねという話になった。

アツオ　大学の寮かなんかにとめてもらおうと思ってる。日本のなかでも、そうやってキャラバンがくめればいいんだけど……

ミエ　お金がかかる。おいてけない子供はつれてかなくちゃならないし。

アツオ　なんとか水牛楽団で暮せるようになりたい。

ミエ　家族でやりはじめたっていうのは、まず第一にそれがあるのよ。そのことをもっといっておこうよ。

アツオ　いまは一回の演奏で、一人最低一万円ということになってる。

ミエ　それが基準で、あとは集会の性質や規模によって、相談に応じるのね。

アツオ　もちろん一万円じゃ食えないけど、それ以上の負担はかけられない。でも、楽団を専門としてやってく以上は、いつかは、だんだんとね。

ユウジ　そういうことにはあまり理解がないんだよ、運動の側には。たとえば労働者だと、いちおう食えるだけの賃金はもらってて、その上で運動をやってる。ところがこっちはそうじゃないんだから、集会にでればでるほど、貧乏になってく。そのことに時間をつかって、ほかのことはできなくなる。なのに、歌をうたうのは奉仕活動だと思われてる。タイで「カラワン」なんか、どういうふうにやってたのかな。チリでは、ビクトル・ハラなんかどうやってたのか、とかね。だから、家族主義になるというのは、一人でやってると、家族がやしなえなくなるにきまってる。それでは困るので、家族ぐるみでやって、われわれにはこれ以外に生きる方法はないということを……。

アツオ　いまのところは、水牛以外の収入が多少あるからやれるけど……

ミエ　収入なんてあるの？

アツオ　わずかね。これから集会で演奏することがふえていくだろうし、そうなることを希望もしてるんだけど、ふえればふえるほど食えなくなることに対しては、若干の不安があるね。

イツコ　いまだって食えないわよ。

アツオ　フィリピンにいってるあいだに、あいつはいつもつかまらないっていうんで、忘れられたのかな、それから三ヵ月か四ヵ月たっても、仕事がこないんだよ。そしたら川崎の「石の会」の岩木さんっていう人が、土方をやらないかっていってくれた。たまたま三里塚の集会で会ったときにね。明日からこいといわれて、まず三日間いったんだけど、その三日間とも、夜は集会やら会議やらがあった。腹は減ってるし、疲れきって、ひとの話をきくのもいやになって、これじゃまずいなと思って、ちょっとやめたんだ。そしたら収入がなくなるっていうんで、家でせっつかれてね、朝になるとたたき起される。でも、「石の会」の人たちは、みんなその仕事をやってるんだよ。女の人にもできる仕事があるんだ。

イツコ　またまきこもうとしてる。

アツオ　いまの土方の仕事っていうのは、昔とちがって、歌がない。「かあちゃんのためならエンヤコラ」とかね。機械でやっちゃって、労働にリズムがない。

ミエ　タイから弁護士のトンバイ・トンパオさんたちがきて、その集会があった。はじめに歌をうたうことになってたのに、フクヤマ

さんがなかなかこないのよ。おくれて、マッカな顔をしてきた。ア、ヤだな、また飲んできたのってきいたら、それがそうじゃなくて、日焼けだったの。

アツオ　でも、一人二万円とるっていうと、水牛楽団だけで十万円だからね。それだけだせる集会というのはまずない。

ミエ　だけど、ユウジさんのコンサートを集会でやるときは、ギャランティは保証されるのよ。それは考えかただと思うな。

ユウジ　うん、それは考えかたなんだな。たとえばピアノひくときには、十万円、それはやすいといわれるわけ、むこうから。ところが大正琴をひいてると、一万円、そりゃたかいといわれる。

アツオ　おなじ人なんだけどね。

ミエ　本人は大正琴のほうをむずかしがってる。

ユウジ　ボタンから指をふみはずしちゃうわけだよ。それを逆にして、ピアノをひいて生活をなりたたせて、あいた時間に水牛楽団をやるというやりかたじゃなくて、水牛楽団をやって、ひまがあったら、ピアノやほかの作曲をしたいと思ってるわけだ。

ミエ　それがしめくくり？

アツオ　タイのカセットふうにプツリと切れる。つぎのページをめくっても、つづきはなし。

水牛楽団演奏曲目

タイ「生きるための歌」
一歩もひくな
白いハト（ガンマチョン）
雨をまつイネ（スラチャイ・ジャンティマトン）
コメの歌（ジット・プミサク、カラワン）
人と水牛（ソムキット・シンソン＋ウィサ・カンタップ、カラワン）
村からのノート（プラサート・ジャンダム、カラワン）

韓国抵抗歌
プリパ　われらのねがい
その日がくる（康宗憲）
わが心の涙（金大中、河勲植）

フィリピン革命歌
翻身　母の歌
祖国（ホセ・コラソン・デ・ヘスス）

三里塚の歌
カオルの詩（東山博＋東山恵津）
朝日の色が変わり（東山薫）
管制塔の歌　茶つみ歌
よねの宣言（大木よね）
百姓は草　ワンパックの歌
野づちの歌

その他の日本の歌
めしは天（金芝河、高橋悠治）
時がくれば（金大中、高橋悠治）
果しない波を渡るための歌（木島始、林光）
キド（木島始、高橋悠治）
絵とき唄ときバナナ食民地（戸島美喜夫）

チリ「あたらしい歌」
ありがとういのち（ビオレータ・パラ）
天使のリン（ビオレータ・パラ）
農民への祈り（ビクトル・ハラ）
魂は旗にみちて（ビクトル・ハラ）
不屈の民（セルヒオ・オルテガ＋キラパ　ジュン）
ベンセレモス（セルヒオ・オルテガ）

パレスチナ抵抗歌
フェダーイ
ビラーディ、ビラーディ

詩二篇

木島　始

まなびあい

——オリエンタ・サージョ

アタミで韓国人が
囲碁の新名人になる

ソウルで日本人が
漆器の展覧会をひらく

ジャカルタでベトナム人が
竹笛の音色をきかせる

カントンでビルマ人が
仏教のちがいを研究する

ハノイで中国人が
水墨画の筆さばきを見せる

どうしてこう心はずむのだろう
利益がからんでいないと

どうしてこう楽しいのだろう
権力がわりこんでこないと

厚い囲み

死をいつも武器の支配は中心に据えつける
いつ自由な歌がアジアから聞えてくるのか

死をかかえこんでいる詩人のそばと知り
足音たてぬように人々は通りすぎていく

死を味わいつくしている詩人に向うと
とっておきの仮面まで剝がれてしまう

死を握りしめている詩人の口からしか
自由への溢れる声が聞えてこないとは

死からは逃げられない人間ばかりなのに
えらぶ足どりで天地宇宙がことなるとは

死刑宣告を受けて立つ詩人は浮び上らせる
白痴美に酔って売り口上おぼえる空しさを

キ・ド

闇討ちで　サムライたちは
切りとった首を　さらしものにした
抜けがけに　やみくもになり
兄弟だって　身内だって　褒美のためなら
切捨御免で　蹴とばしあった　射ちあった
それからチョンマゲを　いっせいに切り
勢にのって　隣のくにに攻めこんだ
憎しみの溝を　掘りすすんでおきながら
大昔　先祖の頃からこうさと　称した
ちがうと言いはるものをすべて　消そうとした
消せるつもりだった

嘘は吹っとんだ　違いがくっきりした
まともに向いあえる　貴重なきっかけ

嘘を吹きとばした以上の爆風が　つづき
鏡　砕け散った鏡の下のもうひとつの鏡
見ようとしなければ　姿は映ろうとせず

見ようとしても　逆さまにしか　我身の映らない
鏡　思いおもいの屈折率で　新しい装おいの嘘を
吸いこむと見せて　はねかえしている鏡

遠くから　近くから　これらの人間の鏡へ
妖しい錬金術使たちからのように
守り神にもなりうる武器の光が
東洋のレンズの焦点距離めがけ
集中した　発火した　ひとを焼くその焔また焔
尊すぎる　いけにえ　また　いけにえの群
火あぶりの拷問台のまぢかにいて
わたしたちは　心眼をひらくまいとした
生きながら焔に焙られる地獄の風とともに
生血が飛び散ってきたのに
わたしたちは　黙ってその味をなめていた

土は焼けた　地底まで焦げた
耳をつんざいて　空気がはじけるたびに
言葉　それが憎しみの種となった

夢という夢が　夜ごとひび割れ
そのひび割れかたの残酷さ　深さが
かえって　ひとみの水晶体を透明にした
人間らしさをなくする　あらゆる仕組み

あらゆる仕掛けを　あますところなく
見るくるしみに耐え　見とおす
勇気もつひとの声が
天を耕すように
鍬を入れだした

ちがう　ちがう
いまとは　ちがう道へ　ちがう歩きかたをと
言いはるひとびとすべての窒息をねらって
何度も　何度も人狩りの網がかけられ
ちからずくの麻酔がくりかえされてきたが
尹東柱の詩句を引きつぎ
「空を仰いで　一かけらの恥なきを」と
わたしたちの頭上　はるか
天の畑に　すでに
真実しか語ろうとしない声は
くりかえし　くりかえし
近づいてくる春を　先に知る
ほんものの種を　憎しみ打ちこわす種また種を
播いている——

注　尹東柱（1917～45）同志社大学に学んだ詩人。T・K生がしばしば引用している。

기도(kido)

김씨들에게올리는(kim shi durege ollinun)

クゥンチョル　ハヌン　ソウルィ　イェオンジャヨ
キコエ　マスカ　コノコエガ
オロカシイ　オロカシイ
ブキミナ　ブキガ　メヲオオウトシテ
フリー　ダェ　ジュン　フリー　ダェ　ジュン
フリーイング　ダェ　ジュン　イズ　フリーイング　アス　オール

カベ　ツキサス　イノリヨ
ボイジ　アヌミョ　コドゥプテヌン
オロカシイ　オロカシイ
ブキミナ　ブキガ　ミミフサゴウトシテ
フリー　チ　ハ　フリー　チ　ハ
フリーイング　チ　ハ　イズ　フリーイング　アス　オール

「祈り（金氏らに捧げる）」

日本語意訳

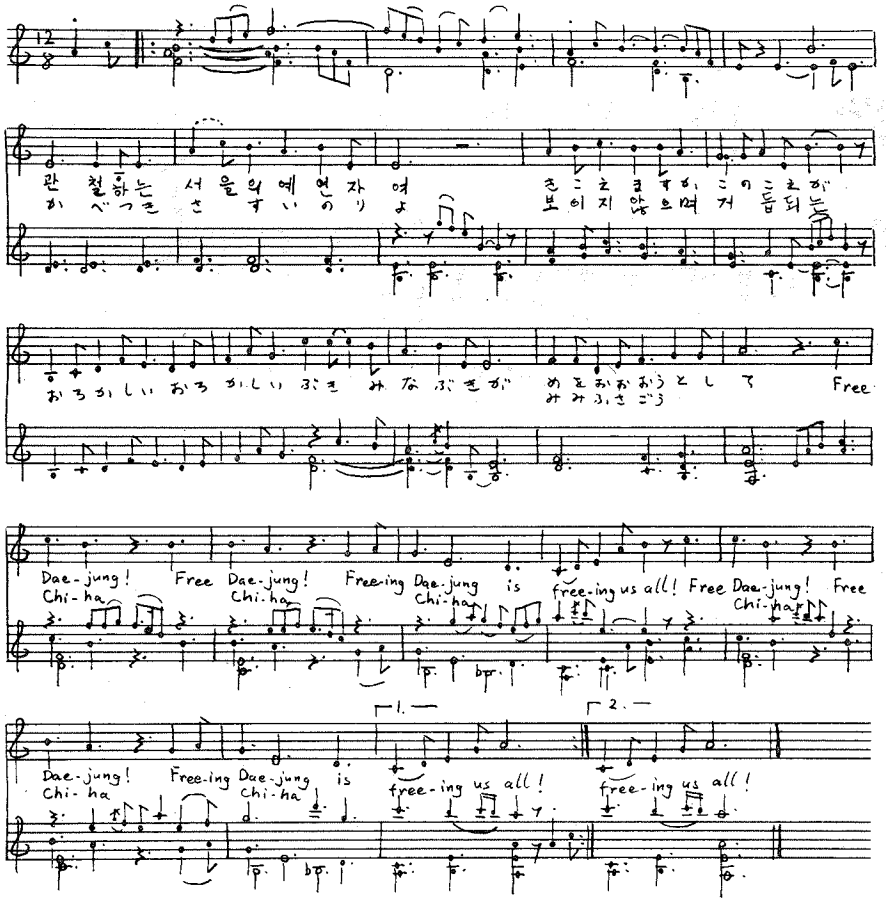
貫徹する　ソウルの予言者よ
聞こえますか　この声が
愚かしい　愚かしい
不気味な武器が　目を敝おうとして
大中を自由の身に　大中を自由の身に
かれの自由なしに　わたしたちすべてに自由はない

壁つきさす　祈りよ
目に見えずとも　くりかえし溢れ
愚かしい　愚かしい
不気味な武器が　耳塞ごうとして
芝河を自由の身に　芝河を自由の身に
かれの自由なしに　わたしたちすべてに自由はない

（キド
キムシドゥルエゲオルリヌン）

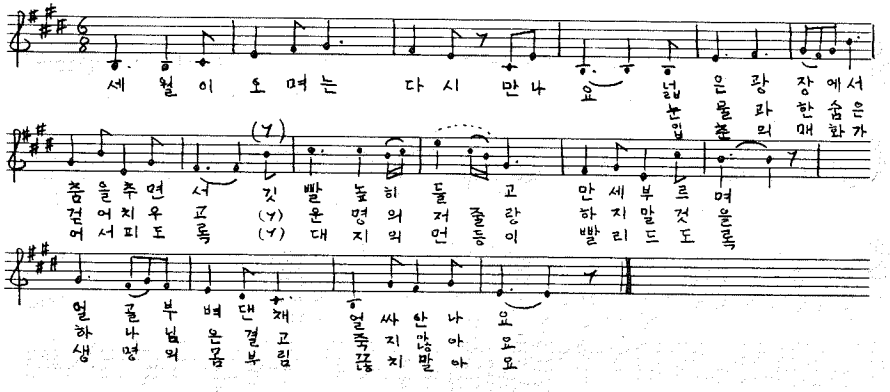
キド（祈り）

詩　木島　始
曲　高橋悠治



歲月이오며는

詞　金大中
曲　高橋悠治



歲月이 오며는

一

세월이오며는 다시만나요
넓은광장에서 춤을추면서
깃빨높히들고 만세부르며
얼골부벼댄채 엄싸안아요

二

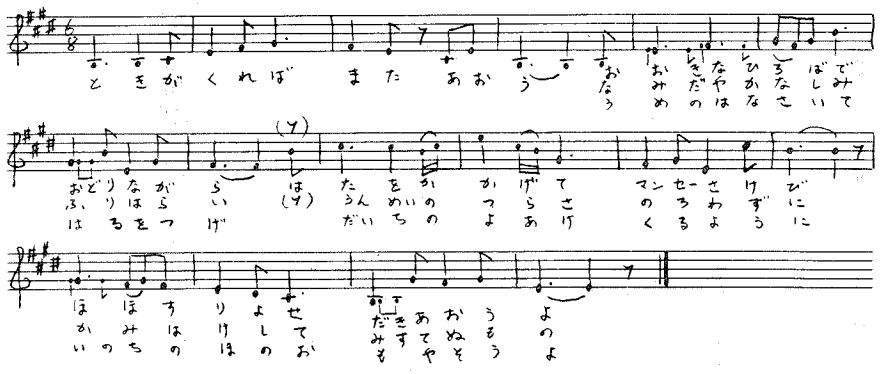
세월이오며는 다시만나요
눈물과한숨은 걷이치우고
운명의저줄랑 하지말것을
하나님은결고 죽지않아요

三

세월이오며는 다시만나요
입춘의매화가 어서피도록
대지의먼동이 빨리드도록
생명의봄부림 끊지말아요

時がくれば

訳　金慶植
曲　高橋悠治



時がくれば

一

時がくれば　またあおう
大きな広場で　踊りながら
旗をかかげて　マンセー叫び
ほほすりよせて　だきあおうよ

二

時がくれば　またあおう
涙や悲しみ　ふりはらい
運命のつらさ　のろわずに
神はけして　見すてぬもの

三

時がくれば　またあおう
梅の花咲いて　春を告げ
大地の夜明け　くるように
命のほのお　燃やそうよ

忘れるな光州（クワンジュ）

——T・K生「韓国通信」より

ドラ　○——○——

男1　あたたかく　いままさに流れだしたそのとき　ふたたび吹きあれるふぶきを死とよぼう。

ドラ　○——

男1　一九八〇年五月を死とよぼう。良心を獄中へ追いやっただけではなく、国民を虐

女1（かん高く）　五月十七日の真夜中、

男1　殺した残酷な時、死の日だった。

女1　全国に戒厳令がしかれた！

女2　政治活動は中止！　大学は休校！

女1　金大中氏をはじめ民主人士が

女1　全員逮捕された。

女2　全員逮捕された。

男2　全員——逮捕された。

太鼓　●—●—▶（くりかえし）

女2　ソウルから軍隊と装

女2　甲車と戦車が南にむけて急にうごきだしている。この夜も、市民を夜間通行禁止におしやったまま、かれらはごうごうとうごいてゆく。

男2　この国の歴史は真夜中、夜間通行禁止の時間につくられる。

男1　軍は国民をまもる存在ではない。まず国民をおそう狼だ！

太鼓　——▶（続き）

タンブリン　●—▽●——▶（独立のテンポで）

女1　光州（クワンジュ）、五月十九日、月曜日。

女2　デモに参加した学生は、わずか二百名ほどだった。それに対して軍隊はヘリコプターなどを動員してペパーフォグをうちこんだので、学生たちは輪になった。そこへ軍隊が突入して銃剣でつき刺した。

女2　全員が殺された！

女1　全員が殺された！

男1　全員が殺された！

（太鼓・タンブリン　止）

男2　学生がにげてゆくのに、あまりひどいじゃないか。一人の老人がいうと、その老人も刺し殺された。

女1・2（そろわず一定のずれをもって）空挺部隊は道をゆくわかい人をみれば無条件に銃でなぐって倒し、銃剣で頭、肩、首をようしゃなくつき刺した。

女1＋2・男1（そろって）人々は血を流しながら路上に倒れた。

男1＋2（そろわず）空挺部隊は、血を流すわかい人たちをナイロンテープでしばり、道にひざまづかせた。

女1・男1（そろわず）全羅道（チョルラド）の奴らは、根だやしにしてもかまわないんだ！

女2　と叫びながら、子どもたちもつき刺した。

男1　タクシーのドアをあけて、運転手をつき刺した。

男2　それをみたほかの運転手たちが、タクシーを軍隊のなかにつっこんだ。

女1　死体と重傷者が道庁の前にあつめられたが

男1＋2　兵士たちがそれを軍靴であしらい、踏みつけ

女2・男1＋2　重傷者たちは、こうして踏み殺された。

女1　光州（クワンジュ）キリスト教病院では

男1（たたみかけるように、だんだん速く）軍隊が乱入してきて

男2　銃で医者や看護婦をなぐり

女1　追いちらし

女2・男1　手術中の重傷者を二階から下に

男2　投げすてた。

女1　抵抗した女たちははだかにされ、木にくくりつけられ、つき刺された！

男1　これは軍ではない！　暴徒のむれだ！

女2　市民たちはこのときから怒りにもえて軍人と機動警察に石を投げつけ、学生と力をあわせてデモをくりひろげた。

太鼓　●—●——▶（くりかえし）

女1　戒厳令撤廃！

男1　金大中（キムデジュン）釈放！

女2　市民学生の血をつぐなえ！

男1　幼稚園の子どもも道ばたの小石をはこびながら「軍人がきたら殺してやる」とつぶやくほどだった。

全員（口々に）戒厳令撤廃！　金大中（キムデジュン）釈放！

市民学生の血をつぐなえ！（くりかえし、だんだんとかわって）死んだものたちを生きかえらせてくれ！（くりかえし、だんだんにかわって）殺してくれ！　いっしょに死のう！

（この間太鼓加速——▶……止）

ドラ　○——

男1　証言1、五月二十二日午後四時。無差別虐殺をした軍人たちは、まる一日食事ぬきで、何か薬をいれた酒をのまされてきたと自白した。一個中隊の兵力が、学生たちの手で武装解除されたのは、かれらが酒からさめて、自分たちが犯した残虐行為におどろいたからだった。その半数以上は下士官だった。ひもじいと訴え、市民たちから

十分な食事をあたえられた。

ドラ　○――

女1　証言2、五月二十二日午後十一時四十五分。木浦（モッポ）市民のかなりの数が武装した。務安（ムアン）、一老（イルロ）から人々が農具などをもってあつまってくる。われわれはここで自由と民主をまもって死ぬだろう。あう人ごとに伝えてください。われわれ全南（チョンナム）の人間はたたかって死ぬのだと。

ドラ　○――

女1　みなさんがわれわれのためにできる

男2　証言3、五月二十三日。全州（チョンジュ）

女1　ことは祈ることです。祈ってください。

男2　の司祭団は市民とともにたたかい、

女1　い。それをみんなに頼んでください。

男2　いっしょに死ぬことにきめた。いま

男2　沈黙と傍観は、民族最後の罪になるだろう。

男2　われわれが死んだという知らせをき

女2　ソウルでは五月二

男2　いたら、どうかみなさん、最後の愛

女2　十三日の朝から予備軍としてわかい

男2　のお祈りを。

女2　人たちが召集された。これも市民の

男1　抵抗をおそれて事前監禁したことを、

女2　二十四日、

男1　意味するにすぎない。

男1　ソウルの警官派出所などから武器が

女1　没収された。武器が市民の手にわた

男1　全斗煥（チョンドゥファン）はいま、自分の副官にもピス

女1　ることをおそれたのだ。

　　トルをもたせない。

男2　強力な軍隊二百名にまもられている。

男1　長い間、夜になっても家にかえらず、保安司令部で寝起きした。

女2　さあ、それで政治権力をにぎりつづけられるだろうか。

タンブリン　●―●―●―●―●―→

女2　このたたかいの間、光州（クワンジュ）市民たちはものをわかちあった。

男1　商店街は裏のドアをあけて取引した。かけでもものをくれた。

女1　食事も最初はたらないとおもって食事の量をへらしたが、あとになると、そんな心配はなかった。

女1・男1　みんなわけあったからだ。

女2　献血はありあまってつかいきれないほどだ。

女1＋2・男2　カネもものも必要ではない。真実だけが必要だというのだ。

男1　かれらはひとつに団結している。

（タンブリン　止）

太鼓　●―●―→

男1　一週間、光州（クワンジュ）市民はよくたたかった。

女2　報復を自制した秩序ある行動だった。

男2　外部の支援のない孤独なたたかいだった。（太鼓　止）

女1　五月二十七日朝三時に戒厳軍の攻撃がはじまり、銃声はあるところでは八時半までもつづいた。

女2　軍は地上からだけではなく、ヘリコプターからも銃撃を加えた。

男1　闇にまぎれて近よっては高性能のガスを発射したので、武装市民たちは体を自由にうごかすことができなかった。そこで六百名以上の死者がでた。

女2　全斗煥（チョンドゥファン）はこんどの事件で、国際法で禁じられているダムダム弾をつかわせたといううわさがある。それで証拠をのこさないためには負傷者も処置しようとした。数多くの死体もはこび去られた。やいてしまったともいわれる。

男1　いま生きのこった人たちは恥らいの日日を送っている。ひとの子を死なせて自分の子はまもったことになるからだ。そういう意味でも光州（クワンジュ）市民は口をひらくことをためらう。

男2　光州（クワンジュ）は沈黙の都市だ。口をきくとすれば、おだやかに「事実にできるだけ近い報道をしてください」というのだが、それは耐えがたい恨みのこもったことばなのだ。

女1　われわれ光州（クワンジュ）市民が死んでゆくとき、あなたたちは何をしてくれたのですか。いまさら何をたすけるというのですか。まだ負傷した市民を助ける血があります。残りすくないが食糧もあります。おたがいにすこしずつわかちあいます。援助物資なんかいりません。

女2　国民を敵として虐殺する軍隊。それで安保ができるとおもっている。それがアメリカや日本の資本家がもとめるものであろう。それがアメリカの軍人が考える安保であろう。かれらは韓国でもっとも腐敗した光州（クワンジュ）事態

男1　　涙と血にいろどられた

女2　勢力とむすんで良心的な国民とはま

男1　の十日間――その悲劇の五日は去り、

女2　ったく違う韓国像、アジアの安定と

男1　噴水だけがことばもなく噴きあげる

女2　平和の像をえがいている。それがか

男1　――このつらさを抱きしめたまま――

太鼓　●●●●―→（だんだん強く）

女2　れらの目先の利益になるとでもおも

男1　非命に逝った英霊たち――となり人

女2　っているのだろう。

男1　と食をわかちあった隣人愛――これらすべてが民主市民の誇りではないか。光州（クワンジュ）は永遠である。

女1　光州（クワンジュ）の問題は決して解決してはいない。恨みはつもりつもれば、いつかは爆発するものだ。死んだ人々の意をうけついで河が起るかわからない。韓国の正義と民主主義が光州（クワンジュ）を通してついに達成されるのではなかろうか。光州市民が流した血は、歴史の花となってふたたび咲き出るだろう。

太鼓＋ドラ　○―○―○―○―

壁のうちそと

鎌田　慧

「水牛通信」(八〇年十一号)に掲載された「獄中から」の手紙を読んでいて、わたしはすっかり忘れていたことを想いだしたのだった。押川慶吾はつぎのように書いていた。

「昨年の暮れに船橋署から千葉刑に護送された時以来、はじめて車窓から目にする獄外の世界は、なにもかも珍しく、新鮮で、心が浮き浮き踊るようでした。千葉刑へ護送されてきた時は、私は眼鏡を逮捕時のどさくさで紛失していたので、ド近眼の私にとって、あたり一面がぼんやりした世界で、自分がどのようなところに収容されているのか、見当がつかず、コンクリートの高い塀越しの世界を、そこから聞えてくる霧笛の音や犬の遠吠え、人声などに耳を澄まして、未知の世界を窺うように、あれこれと想像をめぐらしていましたが、実際に外の世界を見て、自分がどんなところにいたのかを知ったときには、やはり大きな感動を覚えました」

といって、なにもわたしも刑務所にいたことがあるというのではない。彼の手紙に静かに流れている感性は、たぶんに獄中生活によって培われたものであろうことを理解できたにしても、できることなら刑務所とは無縁な一生を送りたいものだ、との考えに変りはない。わたしの記憶をよびおこしたのは「実際に外の世界を見て、自分がどんなところにいたのかを知ったときに、やはり大きな感動を覚えました」という条(くだり)だった。

二〇年ほどまえ、安保闘争が終ってまもなく、わたしはスクーターで転倒して救急病院に担ぎこまれたことがある。水道橋交差点での事故だった。救急車のベットから、車窓の上方に覆いかぶさるようにみえる黒々としたビルやネオンの赤によっても、どこを走っているのかかいもく見当がつかなかった。それは長い時間のように感じられたが、病院は結構ちかかったのだ。病院の窓からニコライ堂の先端がみえた。三ヵ所骨折の左足が元通りになるかどうか、そのことがとても不安だったが、それとおなじ程度に、あるいはそれ以上に、自分のいる場所を確認できない不安に落ち着けずにいたような気がする。そのとき、わたしは、隔絶した世界に閉じこめわれているものの不安を実感したのである。

窓からみえる青空と、ニコライ堂のドームは、格子越しにみえる空の美しさをうたったヴェルレーヌの詩を想い起こさせた。欠落していた世界が、ようやく自分の地図の中によみがえってきたのは、二ヵ月後に退院し、アパートから電車に乗って通院するようになってからである。松葉杖を離せるようになったのは、半年以上もたってからだが、そのことよりも、入院していた病室と外界の道が自分の中で結びついたときの方がうれしかったような気がする。

しかし、だからといって、外を歩きまわっている人間が、いま自分がどこにいて、どこにいこうとしているかをよくわきまえている、ということでもない。「だが、獄中生活には、それ独特の良さもあるものです。その第一は、獄外では感じられないこと、考えられないことが、獄中では強く感じられ、はっきり考えることができることです。自然の美しさ、自由のすばらしさに対する感性は、閉じこめられた独房の生活の中で、いやがうえにも鋭敏にとぎすまされていきます」と押川慶吾は書きつけている。閉じこめられたひとりの人間が、全世界と対峙している姿を想像することができる。彼は、おそらく、彼を閉じこめることになったものへの憎しみと同時に、独房の外にある世界とひとびとにそれまで以上に注意深くなり、想いを熱くしているにちがいない。三里塚での闘争が、このように思索し、そしてなおかつ、自分の内部に閉じこもるのでなく、あらたな視点でまわりの世界を捉え、変えようとしている多くの人間を産みだして戦い続けられているのを感じることができる。あるいは外にいる人間の方が世界をぼんやりみているだけのことかもしれない。

救急車ではこばれるとき、わたしを捉えていた感情は、これだけ大騒ぎされて骨が折れていなかったらちょっとカッコ悪い、といったようなものであった。別に税金の浪費を心配したのではなく、わたしは自分が騒ぎの当時者になるのは本当に嫌なのだ。まあ、それはともかく、病室で考えるようになったのは、カネのために働いていて、それで命を落したり、怪我したりすることの阿呆らしさだった。その日わたしは、アルバイトで、印刷物を製本屋にはこぶ途中の事故だった。いま、この瞬間まで、工場で息をひきとったり、手や足を失なった労働者の数は、何十万、何百万に達することであろう。労働者の悲惨の極致とは、働くほどに疎外が深まることと、労災によって生存権を奪われることにある。

これまで、わたしは、そんな死者の遺族たちと何十回となく会っている。それぞれに共通するのは、夫や子供がでかけて帰らなくなったその日の朝の記憶の鮮明さである。時間が突然たち切られ、その断面はいまなお凍結されたままである。ひとつの終りとしての病死とのちがいである。たとえば、その日、炭住から下の道へ降りていき、「忘れものしたよ」と帰ってきたときの夫のテレた表情が、もぎとられた時間の痕跡だったり、出稼ぎに出るバスの窓越しの笑顔が最後のものだったりする。それらは、工場側がちょっとした気をつかえば、記憶するまでもない日常茶飯のひとこまですんだはずのものである。

われわれはいまどこへ行くのも自由である。さえぎる壁はない。しかし、いまどこにいて、これからどっちにむかおうとしているのか捉えどころのない気分に襲われているのも事実である。どこか息苦しく、あたりはほの暗くなりつつあるようだ。これから先の自分を捉えきれないのは、投獄や労災事故にも匹敵する不条理であり、自己疎外である。日常生活そのものが凍結されようとしているいまを研ぎすました感覚によって記録し、そこから風穴をあけ、歴史を遠くにみたい。そんな存在感あふれるさまざまなひとびとの表現を「水牛」は載せていきたい。

三里塚たたかいの暦

三里塚・たたかいの暦を闘う人民のなかへ

暦とは、本来は人民が自分でつくるべきものであります。人々が自然と対応するなかで、自然との約束ごとを季節にしたがって自らに課するのが暦であります。それは自然のなかでの生活の段取りであり、その節々が祭りとなります。

ところが三里塚では、自然との対応だけでなく、権力との対決が生活のなかで決定的な要素となります。したがって三里塚の暦は、権力と対決する段取りで、それは15年の戦いをふりかえり、新しい戦いを準備するということであります。

このような趣旨で編成された「81年・三里塚たたかいの暦」は、それゆえに、新しい年をむかえるにあたって三里塚から全国の戦う人民への連帯のよびかけであります。ひとりでもおおくの人がこの「暦」によって、連帯の環をいっそう固くすることを希ってやみません。

一九八〇・一〇・二〇

労農合宿所　代表　前田俊彦

三里塚・人民闘争の日

- ●71. 1.13　小川明治忌
- ●78. 2. 6　横堀要塞戦
- ●71. 2.22　第一次代執行開始
- ●68. 2.26　反戦・学生との共闘確立
- ●78. 3. 1　動労燃料輸送スト
- ●78. 3.26　管制塔占拠
- ●78. 3.28　政府「開港」断念
- ●79. 3.30　動労千葉独立
- ●77. 4.17　三里塚最大結集
- ●77. 5. 5　労農合宿所開設
- ●77. 5. 6　鉄塔破壊
- ●77. 5. 8　東山薫虐殺
- ●78. 5.12　成田新法成立
- ●80. 5.17　光州人民決起
- ●78. 5.20　強行開港
- ●78. 6.13　新山幸男死去
- ●79. 6.17　木の根用水着工
- ●66. 7. 4　三里塚空港建設閣議決定
- ●66. 7.10　反対同盟結成
- ●71. 9.16　東峰十字路戦
- ●71. 9.20　大木よね宅代執行
- ●70. 9.30　三日戦争開始
- ●71.10. 1　三ノ宮文男抗議自殺
- ●80.10.13　自主基盤整備着工
- ●80.10.19　二期阻止・廃港東京総行動
- ●79.11. 2　戸村一作忌
- ●73.12.17　大木よね忌
- ●79.12.15　事業認定期限切れ
- ●77.12.26　大木よねの畑収用

- ● 5. 1　メーデー
- ● 6.15　反安保の日
- ●10.21　国際反戦デー

絵／丸木　俊
デザイン／粟津　潔
発行／三里塚闘争連帯労農合宿所
協力／三里塚芝山連合空港反対同盟

三里塚たたかいの暦
B2　年表付2枚組
カラー　¥1,000

三里塚たたかいの暦企画
東京都新宿区荒木町3 駒ビル304 TEL03（355）4320
三里塚闘争連帯労農合宿所　TEL04797（8）0100

闘い続ける人々の視線に射抜かれて

山崎満喜子

一九七五年、メキシコで開かれた国際婦人会議で第三世界の女性たちから突きつけられた告発は、高度工業国の経済繁栄の中で暮す私たちの胸に、強い衝撃を与えずにはおかなかった。〝帝国主義反対〟〝新植民地主義廃止〟という彼女たちの主張は、あらためて国家間の搾取および抑圧の構造をうかびあがらせ、たんにフェミニズムという共通の基盤を持つということだけでは乗り越えることができない、彼女たちと私たちの間に横たわる深い亀裂を教えてくれたからである。

ラテンアメリカを例にとれば、彼女たちの主張の背後にひそむ四百年余に及ぶ歴史的な搾取（スペイン・ポルトガルによる征服、それにつぐ米国による帝国主義支配）がもたらした特殊状況は実に根深く、そのことを知らずに、彼女たちのコンテクストを理解することは不可能である。彼女たちの発言の背後には、累々たる死者と苦しみの極限で生きる者たちが連なっている。

すなわち、絶対的貧困のうちにまんえんする病気・栄養失調、さらに厳しい飢えの中で死んでゆく子どもたち。大陸のほとんどを占める軍事政権下の国々で、血まみれの軍事行動の犠牲となるおびただしい市民や農民たち。すべての人間的主張をつみとる厳しい弾圧の中でとらえられ、言語を絶するすさまじい性的拷問にさらされる女性政治犯たち。白昼、職場から家庭から路上から連れ去られ、ボロ同然に変り果てた死体となってどこかにほうり出されるか、あるいは永遠に行方のわからない〝政治的失踪者〟たち。

しかもなお、つぶされてもつぶされても湧き上る生死をかけた闘争とともに立ち上る女性は数多い。彼女たちを、死ぬかもしれぬ闘争に駆りたてるものは、たとえ闘わなくても非人間的な状況の中で虫けらのように死んでゆかなければならない厳しい現実である。闘わなければ〝生きつづける〟ことの不可能な人々の強さは私たちの胸を打つ。

そして、銃を持つゲリラ兵士として、きょう書いた文章のために明日はとらえられるかもしれない女性ジャーナリストとして、貧民街であらゆる妨害にめげず、病気や飢えと闘うボランティアとして、大陸の全インディヘナに対して種族絶滅（エスノサイド）をはかる各国政府に抵抗する誇り高い民族の末裔として、さまざまな闘争のまっただ中で、彼女たちの多くは、フェミニストとして自らをとらえかえす。ラテンアメリカの歴史的抑圧構造の最末端で生き続けてきた彼女たちがフェミニストとして目指す解放こそは、人間が果すべき〝最後の解放〟ではないだろうか。

日本の政府、および多くの企業が、チリ、ブラジル等ラテンアメリカ諸国に巨大な投資や経済援助を行ない、大陸で最悪の軍事政権に加担している事実に眼を向ける時、私たちはいや応なく彼女たちの告発とむかいあわざるをえない。〝加害者〟の国の、その繁栄の中で暮す私たちもまた〝最も抑圧される者〟との連帯を自分自身の解放の一環として考えることを始めなければならないと思う。それが、彼女たちの声に耳を傾け、その発言の重さを自らのうちに引受けたいと願う者の出発点ではないだろうか。

私たちとラテンアメリカの女性たちの間に横たわるさまざまな〝遠さ〟を乗り越えるひとつの試みとして、この八月、私たちは「プレセンテ！」を創刊した。年二回の発行で、主にラテンアメリカの女性状況と彼女たちの解放運動を伝える情報誌である。ラテンアメリカでは、革命的な闘争に倒れていった人々を記念する集会で、呼びあげられる死者の名にむかって大衆がひとりひとりに「プレセンテ！」と叫ぶ。決して死者が死んではいず、「私たちとともに在る」のだという死者の精神を受け継ぐひとつの感動的な儀式である。

今、ニカラグアに続き、エル・サルバドル、グアテマラは激しい熱い闘争の中でゆれ動いている。「プレセンテ！」と、いつの日にか叫ばれる人々は、エル・サルバドルの場合一年間に八千人を越えているのである。他方、チリやアルゼンチン、パラグアイ、ボリビア等には、現在もなお激しい拷問の末、闇から闇へほうむり去られる膨大な死者がいる。私たちは、こうした困難な状況の中でしたたかに生き闘い続ける女性たち（そして死んでいった女性たち）に対して、情報誌を作り、彼女たちと私たちの距離をわずかでもちぢめるという作業をとおして、「プレセンテ！」と叫びたい。

日本政府は、来春早々にも、チリの独裁者であり、文字どおり人民の血にまみれた革命圧殺者、大量殺人者のアウグスト・ピノチェットを招待しようとしている。

一九七三年の彼を先頭とするクーデター以来、チリでは人口一千万の国で四万人以上の人々が消えてしまった。十万人の人々が収容所に送られ、組織的な拷問、強姦、飢えを経験した。国外で暮す亡命チリ人はおびただしい数にのぼる。現在、激しいインフレの中を失業者があふれ、最低賃金が月六千円というおそるべき貧困の中で、栄養失調で幼ない子どもたちはバタバタと倒れ、売春行為は激増し、国民の人間性そのものが根底から破壊されようとしている。しかもなお「恐怖政治」の足元からしつような抵抗運動が継続されている

ことを思う時、私たちは血ぬられた独裁者ピノチェットに、決してこの国の土を踏ませてはならないと思う。

「ピノチェット来日阻止のための実行委員会（仮称）」は、いくつかのグループや個人からなり、現在やっと動き始めたばかりだが、私たちはこの運動の中で、主に女性政治犯に対する性的拷問、困難な母と子の状況等、女性の立場からとらえたチリ問題に取り組み、特に女性の参加を呼びかけたいと思う。「プレセンテ！」二号は、ピノチェット来日阻止に関して「チリ特集」を組む。

ラテンアメリカは「遠い国」ではない。独裁者ピノチェットに抵抗する人々は、来日問題に関していっせいに私たちをみつめるだろう。その眼差しに射抜かれながら、私たちは動き始めなければならない。獣姦された女性、強姦されて妊娠し、なお殴打される女性、水につけられ鞭打たれたたくさんの子どもたち、そして永遠にもの言わぬおびただしい死者の眼差しに対して、今、私たちはでき得る限りのことをしなければならないと思う。

最後に「プレセンテ！」について、既刊の創刊号と、準備中の次号を紹介したい。

「プレセンテ！」――ラテンアメリカにおける女性解放――創刊号
定価六百円　五〇ページ

①発刊にあたって
②ラテンアメリカにおける女性解放運動
③日本の女性解放運動とラテンアメリカ
④無知なる代弁者
⑤詩　アメリカ讃歌――パブロ・ネルーダ
⑥各国レポート――チリ、エクアドル、パラグアイ、ボリビア、ペルー、アルゼンチン、ブラジル

二号予告

①チリにおける女性政治犯に対する性的拷問の実態――国連報告（一九七五年）より
②日本・韓国・チリ・おんな――経済関係にみる抑圧への加担
③来日した cut（チリ労働者中央本部）へのインタビュー
④翻訳論文「マチスモとエンプリスモ」
⑤小さな同志マファルダ――ラテンアメリカの人気漫画にみるフェミニズムの視点
⑥各国レポート――エル・サルバドル、グアテマラ、ニカラグア

連絡先
国立市富士見台一―二八―一―二七―五〇二　山崎方　タジェール
ドミティーラ　〒〇四二五（七五）八三七七

食いすぎの害について

――国立民族学博物館見物記

津野海太郎

好奇心によってうごくということを、私は原則的によしとする。だが限度をこすと、それはうす気味わるいものになる。国立民族学博物館の場合でいえば、そこに示された日本国の学者たちの好奇心は、私には限度をこえていると思えた。

十日ほど前、用事があって大阪にいったついでに、地下鉄にのって、千里の万国博記念公園にはじめて足をふみいれた。民族学博物館は、窓のない灰色の壁を渋い銀色でふちどりした、大きな、いかにも高価そうな建造物だった。一般の見物人に公開されているのは一階の一部と、主として二階で、そこがオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、西アジア、東南アジア、中央アジア、北アジア、東アジアと分類された展示場になっている。それとは別に、音楽や言語にかんする展示もある。見学コースの動線のながさは一・五キロ。中央の大回廊のまわりには、ビデオテーク用の小部屋が四十室もうけられ、五分から十五分にまとめられたおおくのビデオ・テープのうちから、すきなものをえらんで見ることができる。

おびただしい陳列物の量である。しかし、まるごともってこられたジプシーの家馬車やモンゴールの包（パオ）には、まだおどろかなかった。アフリカやラテン・アメリカの彫刻類にしても、あきれるほどの展示量だったけど、まだ私は元気だった。びっくりしたのは、そしてどっと疲れがでたのは、東南アジアの展示コーナーにおいてだった。

私が民族学博物館を見物にいった、その遠い動機ともいうべきものは、三年前に上演した「醜いJASEAN」というタイの解放劇にある。そこにでてくるタイの農村でつかわれている農具――カサやスキやクワやカマのかたちやつかいかたがわからず、いそいで、留学生たちにおしえてもらった。それはたのしい経験だった。そうしてつくったボール紙や木製のニセの農具から、それまで知らなかった、べつの世界にふれることができたような気がした。もしかしたら、あのニセの農具のホンモノにお眼にかかれるかもしれない。そんなふうに考えて地下鉄にのったとき、私の好奇心は無邪気なものだったはずだ。しか

し、帰りの地下鉄のなかでは、もはやそうではなかった。学者たちのおかげで、私は自分のささやかな好奇心にたいしてすら、異和感をおぼえざるをえないような状態になっていた。

お眼にかかれるかもしれないなどという、なまやさしい話じゃない。たとえばカサひとつとってみても、タイ各地のものだけではなく、東南アジア全域からあつめてきたカサが何十個も、大きな壁面いっぱいに、整然とならべられている。私たちがボール紙でつくった、あの頭のところをちょっと平たくしたかたちのカサは、タイ南部のものであったことがわかった。スキやカマやクワにしても、おなじことである。黒と銀を基本にしたメタリックな空間に、それらの農具が、漁具が、家具が、玩具が、祭りの用具が、適度にゴチャゴチャと、つまり充分に計算されたしかたで陳列されている。たしかにお眼にかかった。いや、眼で食って、ついに私は食いすぎた。

中国やインド、とりわけ朝鮮の展示が見あたらない。ふしぎに思った。だが、売店で買ったパンフレットを見て、謎がとけた。これらの地域に関連する収蔵品は数がおおすぎて、現在の施設では陳列しきれないのだ。そのために新しい棟を準備中であるという。いま一般に展示されているのは五千点。どんどんふえつつある収蔵品のわずか一割たらずにすぎない。

ブレヒトはガリレオ・ガリレイについての芝居を書いて、かれの知識欲を、いくらつめこんでも満足しないかれの食欲にかさねてみせた。そのガツガツとなりふりかまわぬ欲望があったからこそ、近代科学が生まれたのだが、その近代科学は必然的に人類に原子爆弾をもたらした。したがって、われわれは食いすぎに注意しなければならないというのが、そこでのブレヒトの意見だった。民族学博物館の旺盛すぎる食欲は、このブレヒトの警告を私におもいおこさせる。石毛直道助教授はこの博物館に「食生活実験室」をもっているらしい。かれの『食生活を探険する』や『食いしん坊の民族学』は、それ自体としてはちっともイヤな本ではないが、博物館――それも強大な国家の力にささえられた博物館の食欲には、どこかイヤなところがある。

巨大博物館のイヤなところは、イギリス植民帝国の産物である大英博物館に典型的に示されている。それとよくにた感じが、この民族学博物館にもつきまとっている。「民族学博物館は、世界人類の多様性を一堂にあつめて展示するところのものである」として、さきほどのパンフレットのなかで、館長の梅棹忠夫がつぎのように書いていた。

このような民族学博物館は、ヨーロッパやアメリカの諸国では、すでに半世紀もまえからりっぱなものが設置公開され、市民の要求にこたえてきた。わが国においても、すでに四十数年も前から設立の計画はあったが、実現をみずに今日にいたった。このほど、機熟して、わが国においても国立民族学博物館が創設され、公開されるにいたった。さいわいにして、その規模、構想は、世界のこの種の博物館のうちでは、まず第一級のものとすることができた。おくればせながら、これで世界の先進諸国と肩をならべることができるようになったのである。

いま書きうつしていて、はじめて気がついた。これは一九七七年、この博物館の開館にあたって書かれた文章である。それから四十数年前といえば、一九三〇年代の後半にあたる。それは日本におけるアジア研究が、もっともさかんだった時期である。いうまでもなく、その背後には大日本帝国のアジア侵略という現実があった。もし本当にこの時期に民族博物館の設立計画があったのだとすれば、そこにこうした現実からの要請がつよくはたらいていたであろうことは、想像にかたくない。とすると、「このほど、機熟して」という梅棹のことばには、いったいどんな意味がかくされているのだろう。

民族学博物館にいった翌日、たまたま京都でひらかれていた「フィリピン・バナナ」の集会に出席した。それは、ミンダナオのバナナ農場ではたらく労働者たちのたたかいを組織してきたサントスさんをむかえて、日本全国で一ヵ月にわたって連続的にひらかれる集会の、第一回目にあたる集会だった。

「すわって話させてほしい。私は背がひくいので、すわっても立っても、見える人には見えるし、見えない人には見えない。おなじことでしょう」と、はじめに笑わせて、だがかれの話は相当にきつい内容のものだった。かれは住友商事系のガデコ農園における労働者のたたかいと、そこにくわえられた弾圧について語り、自然資源や人的資源がこんなにもゆたかなのに、こんなにもフィリピンがまずしいのは、われわれが阿呆で怠惰なせいではないのかと自問せざるをえないところまでおいこまれた、かれらの絶望について語った。かれの話からは、はじめからおわりまで、こんなところで、はたして自分の話がうまくつたわっているのだろうかという疑問やいらだちが、たえずただよいだしているように感じられた。

「日本はゆたかだ。ゆたかな日本の街を歩きながら、この国がこんなにゆたかになるために、フィリピンの富がどれだけここに移されなければならなかったかと考えました。私たちのためになにができるかではなく、バナナをとおして日本とフィリピンの関係がどうなっているかを知ることによって、日本でなにができるかを考えてほしい」

日本人の底知れぬ食欲をみたすためのバナナ農園が、ミンダナオの自然、そこでの農業や漁業生活を破壊しつつある。象徴的ないいかたをすれば、片方の手でアジアの自然とアジア人の生活を破壊しておいて、もう片方の手で、もはやつかい道がなくなった生活用具――農具や漁具を二束三文で買いあさり、日本の「市民の要求にこたえて」、さあ、ここに「世界人類文化の多様性」の見本がありますよ、人間の生活はなんとさまざまで、なんとゆたかなのでしょうと、きれいな顔、ピカピカの口調でまくしたてる。つまりは、その総体がわれわれの日本というやつなのだ。民族学博物館を絶対に見せたくない人がいるとすれば、サントスさんはそのひとりである。私は臆病だから、すくなくとも、その場にいあわせたくない。

民族学博物館は国立なので、出金伝票がないと予算がうごかない。それで物々交換がふつうの土地でも、現金をばらまいて、ものを買いあつめる。そのために経済秩序がメチャメチャになってしまった土地もある。

真偽のほどはたしかめていないが、あとでそんな話も耳にした。いかにもありそうなことではないか。そして、おおかれすくなかれ、経済大国のカネの力をバックに、そのようにしてかきあつめてきた陳列品に、ここでは日本語のレーベルしかつけられていない。意図してのことらしい。英語やフランス語はもちろん、それが現地でどのように呼ばれ、どのように記されているのかもわからない。これは梅棹館長のいう「市民」が、サントスさんをもふくめての世界の「市民」という意味でなく、ひたすら日本国民のみを指していることの証拠といえるだろう。日本人の胃袋と好

奇心をみたすために、世界が存在する。「世界人類文化の多様性」にむけてひらかれた外見の裏側には、そういう哲学がこびりついている。だからこそ、ようやく機が熟して、「世界の先進諸国と肩をならべることができた」などと、楽々といってのけることもできるのだろう。

＊

民族学博物館の建物は窓のすくない要塞型である。NHKや成田空港や朝日新聞社の新社屋がそうであるように、大型コンピューターにささえられた情報機関は、かならずこのような建造物を必要とするものらしい。その点でも民族学博物館は、今日の日本にもっともふさわしい施設である。この博物館の三階には、一般の入場者はあがっていくことができない。ほかの情報要塞のような、威圧的なガードマンのすがたこそなかったけれども、一階にも二階にも、立入禁止の立札がめだっていた。

三階は、情報管理施設によって占められている。情報管理施設では、世界の諸民族に関する資料を整備、保管して、研究者の利用に供するとともに、民族学的情報の管理、検索システムについての開発研究をおこなっている。ここには、電子計算機室、図書室、HRAF（ヒューマン・リレーションズ・エリア・ファイルズ、世界の諸民族に関する情報を約三〇〇万枚のカードに整理したもの）室、地図資料室、スタジオ（VTR録画、映画撮影などに使用可能なスタジオ）などがある。

（総合案内）

梅棹忠夫は一九六九年に、岩波新書で『知的生産の技術』という本をだした。カード・システムの徹底化とカナ文字タイプの採用ということが、その本の中心におかれた主張だった。いまから見れば、そのどちらもが、一九七〇年代以降の日本社会の急激なコンピューター化にそなえての、大衆的な規模での意識革命を用意する「知的生産の技術」だったことがわかる。ノートをはじめとして、きたるべき社会にふさわしくない道具や技術は、思いきって捨ててしまえ。かれはそう主張し、この主張を新しい博物館の組織原理にした。そして地球上に生きる諸民族の文化を、無数の小単位の情報（五万点の収蔵品、三百万枚のカード、映像資料など）に分解して、貨物船や日航機で日本にはこんできた。その量はいまもいっそうふえつつある。すでに腹いっぱい食いすぎた男が、さらに効率よく食いつづけるためにこらした工夫が、ここでいわれているところの「情報の管理、検索システム」である。

人間の生活や文化を小単位の情報に分解して、一個所にあつめてみせるという点で、民族学博物館はカタログ雑誌によく似ている。

実際、黒と銀に統一された「クリーンでファンクショナルな」空間に、こまごました陳列品が適度にゴチャゴチャとつめこまれているさまには、『ポパイ』や『プルータス』や『モア』の大がかりな立体化といったおもむきがあった。博物館ゆきということばが古物を意味する時代をおわらせたい、博物館は未来的な文化施設なのだという梅棹忠夫の主張は、こうした空間設計によってみごとに裏打ちされている。エキスポ・ランドに車を走らせ、ひろい展示室や回廊やビデオテークを、コンピューターの風に吹かれながら散歩する。そういうたのしみのかたちが、これからの日本人にはもっともふさわしいという基準なり理想なりを、梅棹は、カタログ雑誌のプロデューサーたちといっしょにつくりだし、それを若者たちに具体的なものとして示してみせたのである。それはじつは、具体的なもののように見えるまぼろしにすぎないのだが、そのきわどさがまた、新型の博物館やカタログ雑誌の魅力になる。

私のアメリカ人の友人に、『ポパイ』や『プルータス』を見ると、たちまちカッとなる男がいる。グラビア印刷のペラペラ紙をめくってもめくっても、そこにあるのはアメリカとアメリカ人の写真ばっかりじゃないか、とかれはいう。しかもそれらの写真のおおくが、かれが住んでいる西海岸の都市の日常生活の断片をうつしたものなのだ。

自分たちの生活が、おびただしい豆情報にきりきざまれ、こんどはそれが、若い日本人の生活スタイルの基準や理想を示すものとして、でたらめに再構成されてしまう。かれのなじみの肉屋のおっさん、大学の庭、コーヒー・ショップの椅子、いつもの缶詰やビール瓶やTシャツやギター――すべてが現実にあるものなのに、なにひとつ現実でない。それを見ると、かれは日本がきらいになり、ついでにアメリカがきらいになる。こんなクソみたいなアメリカがあるものかと思いながら、もしかしたら、これがアメリカなのかも知れないという気がしてくる。だから日本にいるとき、かれはできるだけ『ポパイ』や『プルータス』から遠ざかるようにしている。気持のバランスをくずさないために、本屋にはいっても、その手の雑誌がおいてあるコーナーには絶対に近よらない。でも東京にいるかぎり、もう逃げおおせることはできないようだとかれはなげく。なぜなら、東京の街自体がものすごいいきおいで、ペラペラ紙にグラビア印刷したアメリカみたいになってしまったし、もっとそうなりつつあるのだから。

私たちはカタログ雑誌を見るが、あれで本当に見ていることになるのだろうか。アメリカ人の友人はそれを本気で見ようとして、あやうく気がくるいかけた。見るかのごとくして見ず、見てるとは思えないほど軽く見るというのが、カタログ雑誌とのただしいつきあいかたなのにちがいない。とうてい消化しきれないくらい大量のコマギレ情報を食いすぎて、私たちの眼はニヒルになった。

こうしたニヒリズムを国立民族学博物館がさらに増大させる。対象が都市文明から「野性」の世界にかわっても、情報の収集や展示のしかたはまったくかわらない。はじめに書いたように、私は東南アジアの展示コーナーにいたって、ついに疲れはて、腹を立てはじめたわけだが、これは壁いっぱいのカサの大群と本気につきあうことで、それらのカサが実際につかわれていた社会をかいまみたいと、むなしい努力をこころみたことの当然の結果なのだ。カタログ雑誌とおなじように、もっと軽快に、ほとんど見たか見ないかもわからないほどの軽さで見る。たぶんそれが民族学博物館との唯一のただしいつきあいかたなのである。そこにあつめられた農具、漁具、家具、玩具、祭りの用具は、いかにもホンモノらしく見えるが、じつは、国立民族学カタログ館を構成するコマギレの立体写真にすぎない。こんなホンモノめかしたニセモノにくらべれば、ボール紙製の生粋のニセモノのほうが、よっぽどいきいきと私たちの眼にホンモノの世界を見せてくれた。

カタログ雑誌のなかのアメリカと同様に、「世界人類の多様性を一堂にあつめた」と称する民族学博物館の空間も、人工的なユートピアの性格をもたされている。と同時に、ここは梅棹忠夫がいうところの「お役所」であり、文部省学術国際局に属する国家機関である。つまり国立民族学博物館とは、それ自体が「お役所」であるところのユートピアの小さな模型なのだ。

このユートピアは現在の国家組織をまったく否定しない。民族学博物館計画がスタートした一九六〇年ごろ、おおくの官僚や清水幾太郎のような知識人が、それぞれの「コンピュートピア」構想を発表した。近い将来、民衆は自分が生きる意味を労働ではなくレジャーに見いだし、かれらの生活を知的エリートの超人的活動がしっかりとささえていく、そのような社会がかならずやってくると、かれらは口々に予測してみせた。梅棹もそれと遠いことを考えていたわけではない。コンピューター端末機のうちのいくつかは、「お役所」のサーヴィスとして私たちの手にゆだねられるが、そのおおもとは、ひとにぎりの知的エリートによって独占される。かれらは私たちを情報遊園地にとじこめ、私たちの三階への立入りをていよく拒絶する。

少数の頭のいい官僚たちが、「知的生産の大技術」としてのコンピューターを駆使してつくりあげた理想社会で、ニセの経験を大盤ぶるまいされ、ぼんやり遊ばせてもらう民衆の気持ちが味わいたかったら、ぜひ民族学博物館をたずねてみるといい。入館料は二百円。地下鉄千里中央駅からバスの便あり。

編集後記

これで雑誌の一年間が終りました。おぼろげながら、方向は見えてきたような気がしていますが、読者のみなさんはどうお感じになりますか。

韓国の状況にあきらかなように、アジアの民衆の息吹きにふれる通路はますますほそく、とざされようとしています。日本国内での運動の文化も、それに対応したかたちで場がせばめられてゆきます。これが日本にある「自由」の実体なのです。

個人購読者の大部分が、この号で購読料が切れます。振替用紙が同封されていたら、年内にはらいこむようにしてください。一月十五日頃までに一月号がとどかなかったら、払いこみを忘れていたことを思いだしてください。そして、この雑誌がつづけられるかどうかが、そこにかかっているということも。

もし「水牛」がおもしろいとおもわれたら、ともだちにもすすめてください。五部以上まとめて購読されれば、送料はこちらで負担します。十部以上なら、その上一部つけます。申しこんでください。感想などあれば、どんどん送ってください。

購読の御案内

＊本誌は書店にはおきません。毎号確実に入手されるためには編集部あて予約購読の申し込みをしてください。発刊と同時に直送します。

＊申し込みと送金は郵便振替（口座名水牛編集委員会、口座番号東京四―九一七九二）または現金書留でお願いします。住所、氏名、電話番号、何号からということを明記してください。

＊購読料は送料とも一年分三〇〇〇円、半年分一八〇〇円です。

水牛通信　第二巻第十二号
一九八〇年十二月十日発行
定価　二〇〇円
発行人　堀田正彦
発行所　水牛編集委員会
〒154 東京都世田谷区新町2―15―3　八巻方
電話〇三（四二五）九六五八
振替口座東京四―九一七九二
印刷所　㈱トライプリントショップ